

ヨハネの手紙第一1章5-10節 「罪深い私と神との交わり」

1A 光の中の交わり 5-7

1B 光なる神 5

2B 偽りの交わり 6

3B 御子イエスの血 7

2A 罪に対する態度 8-10

1B 罪の否定 8

2B 罪の告白 9

3B 罪を犯したことの否定 10

本文

ヨハネの手紙第一1章を開いてください。私たちの学びは、前回、1章 1-4 節でした。今晚は、5 節から 10 節までを見たいと思います。使徒ヨハネの手紙を読むと、彼の書いた福音書の中身をじっくりと親しめます。そして、誤った教え、反キリストとヨハネは呼びますが、グノーシス主義、つまり知識偏重の教えに対抗する意味合いを見ることができます。前は、キリストは肉体を持ってこられて、そのキリストと父との交わりが、私たちの交わりなのだという事です。ここにまことの命、永遠のいのちがあるということでした。そして、その交わりには、全き喜びがあり、その喜びを味わうために私は、この手紙を書いているということでした。

ヨハネは、その交わりを保つために、一つの偽りに対抗しています。それは、「闇の行ないをしても、神と交われる」というものです。「キリスト者は救われたのだから、問題はないはずだ」という思いが、私たちをよぎってしまいます。罪を犯すと落ち込みます。そこで、偽教師たちはそういったところに付け込み、「罪はもう赦されたのだから、そうやって悩む必要はないのだよ。自分の肉体で行っていることは、肉体は元々、悪だから、神は関わっておられない。キリストも肉体ではなく、仮に現れてくださっただけで、霊が救われているのだから問題なのだよ。」と言います。それが、グノーシス主義の教えの一部です。このことに対して、ヨハネが偽りを明らかにして、さらに、罪ある者がいかにして神と交わることができるかを教えていきます。

1A 光の中の交わり 5-7

1B 光なる神 5

⁵ 私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。

ヨハネは注意深く、「私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える」と言っています。2 節でも、

「伝えます」と言っていますね。これは自分たちで発見したことではなく、十二使徒が、また他の信徒たちが、確かにキリストから聞き、それを伝えているのだということです。これは、私たち全員の姿勢です。特に教師たちの姿勢です。自分のアイデアなど、神の真理には全く必要ないどころか、それが偽預言であり、神の前で取り除かれるべきものです。

そしてその伝え聞いたものの内容は、「神は光であり、神には闇が全くないということ」ということです。ヨハネは 3 節で、「私たちの交わりは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです」と言いました。その時に知らないといけないのは、「神は光」ということです。

ヨハネは、福音書で、主イエスがいかに光であられたかを証言しています。「ヨハ 1:4-5 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」そして、「わたしは世の光だ」と言われました。「ヨハ 8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」」

聖書の中で神は光であることが啓示されています(詩篇 27:1,36:9 等)。パウロは、テモテへの第一の手紙でこう言っています。「I テモ 6:16 死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。この方に誉れと永遠の支配がありますように。アーメン。」天におられる神が光り輝いており、その栄光には誰も近づくことができません。その幻を見たイザヤは禍だと叫び、自分が滅びるのではないかと恐れしました(6章)。ダニエルは、天からの使いの輝く姿を見て体の力が失せ(10章)、黙示録でヨハネは、栄光のイエスの御姿を見て、死人のように倒れてしまいました。そして新天新地では、天のエルサレムには太陽や月の光はなく、「21:23 神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」とあります。神の栄光と威光の光であり、決して人間が近づくことのできない姿です。

それと同時に、光とは希望を示します。「イザ 9:2 闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く。」ガリラヤにキリストが現れることの預言です。この方に希望があり、命があることが光の中に含まれています。「詩 36:9 いのちの泉はあなたとともにありあなたの光のうちに私たちは光を見るからです。」また、光は真理を知っている状態で、無知は暗闇の中にあることも書かれています。パウロがエペソ人へ手紙を書きました。「4:18 あなたがたはもはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるようには歩んではなりません。彼らは知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、頑なな心のゆえに、神のいのちから遠く離れています。」

けれども、光は清さも表します。使徒ヨハネは、ここにおいては清さとしての光に注目しています。福音書では、こう書かれています。「ヨハ 3:19-21 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その

行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」神には、罪や不義などの悪は何一つなく、欠点のない方であります。ゆえに、次の発言は偽りとなります。

2B 偽りの交わり 6

⁶ もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。

第一の手紙のイントロで、この手紙では、「言っていることと、やっていることの乖離」についてヨハネが書いていることを話しました。グノーシス主義者は、肉体において行っていることは霊的なことに関わりがないと信じていたので、言っていることがやっていることと違っていても問題にしませんでした。事実、自分たちには特別に光が与えられていて、それで神と交わりがあると豪語していました。しかし、キリストは肉体を取られて私たちの間に住み、そしてなおかつ光の中におられたのです。私たちキリスト者も、言っていることで霊的状态が決まると勘違いしてしまいます。または、そうやってごまかそうとしてしまいます。

私の父は、飲食店で長いこと働いていました。お客さんへの接待が仕事だったので、結婚式で司会者を務めると、抜群でした。事実、私と妻の結婚式で、最後に挨拶をしたのですが、クリスチャンが感動して、クリスチャンが彼のことをクリスチャンだと思ってしまいました。言っていることによって、多くのクリスチャンが彼のことを判断したのです。けれども、彼が実際にクリスチャンになるのはそれから 10 年後のことです。信仰を持ってから、教会でも司会をしたことがありますが、私や母に、自分の心の葛藤を話してくれました。話していることが、必ずしも自分と神さまとの関係を反映しているとは限らなかったからです。

言っていることによって、自分が神と交わりを持っているとは限りません。闇の中を歩んでいるなら、交わりを持っているというのは偽りになってしまいます。光と闇が共に住むことはできないのです。「Ⅱコリ 6:14 不信者と、つり合わないくびきをともしないはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。」クリスチャンらしいことは話しても、その歩みが神の命令からかけ離れているのであれば、偽っていて、真理を行っていないのです。

3B 御子イエスの血 7

⁷ もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。

神との交わりというのは、光の中における交わりであります。交わりというのは、共有することです。神には一切、暗闇がないのですから、自分にも暗闇がない、光の中に生きているということ

す。このことによって、初めて神との交わりが確立します。これは、救われている、救われていないという話ではありません。交わりの話です。人が、罪の中にいたら、その人がいくら主を信じているとしても、交わりは失われているのです。罪によって、私たちは救いの喜びが半減します。「1:4 喜びが満ちあふれるためです」と先にヨハネは書きましたが、喜びがなくなります。罪の中で悩みます。ダビデが、罪を犯してそのまま心に留めていた時の苦しみを次のように吐露しています。「詩 32:2-3 幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。私が黙っていたとき私の骨は疲れきり私は一日中うめきました。」

しかし、聖霊によって罪の自覚が与えられ、悔い改めの心をもって主に近づけば、神はその罪を赦し、清めてくださいます。それは9節で書いていますが、そのようにして神との歩みを確かなものにしていきますが、その土台は、キリストの流された血です。御子である方が肉体を取られました。その方がイエスです。イエスが肉体を持って、その血を流されました。その血によって、初めて私たちの罪のすべてが清められます。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」ここでは、「すべての罪から私たちをきよめてくださいます」とあります。一部の罪ではなく、すべての罪です。

そして、ここの「きよめてくださいます」という言葉は、現在進行形で書いてあります。つまり、たった今も、継続して、私たちの罪を御子イエスの血は清めてくださっているということです。ここは大事です、私たちは確かに、すべての罪が赦されて、清められたからこそ、神との交わりができます。けれども、清められ、洗われたという関係があっても、それで日々の歩みの中で汚れてしまいます。主がペテロの足を洗った時に、「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」と言いましたが、イエス様は、「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。」と言われました(ヨハネ 13:9-10)。全身の洗いを、キリストの血によって、御霊によって与えられています。けれども、神との交わりにおいて、絶えずその流された血による清めがあってこそその交わりの継続ができます。

ここが、「私たちはまだ罪深いのににもかかわらず、それでも神は私たちと関わり、交わってください」という真理が成り立ちます。御子イエスの血が私たちの罪を全て清めてくださっているのです。その流された血によって絶えず良心が清められ、それで全き心で生ける神に仕えることができます。こうやって、神が光の中におられるように光の中を歩むことです。

2A 罪に対する態度 8-10

ところが、グノーシス主義者はこれまた偽りを教えていました。そして、これはまた、多くの人の過ち、他の異端の人々も語っていることであります。

1B 罪の否定 8

⁸もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。

イエスによって、すべての罪が取り除かれました。そこで、こういった誤解、あるいは歪曲があります。「そういうことは、私にはもう罪がなくなったのだ」ということです。罪が取り除かれたのだから、罪そのものがないということです。これは、グノーシス主義者がそう教えていました。「高い靈的次元に入ったのだから、あなたがたには罪はないのだ」としました。けれども、異端はそのように教えます。救援派、あるいは救い派と呼ばれる韓国系の異端があります。日本の教会に対して、手紙を広範囲に送って、普通のキリスト教の団体のようにして入り込もうとしています。彼らは、「新しく生まれ変わったら、もう悔い改める必要はない。」と教えるのです。もう十字架で全て赦されたのだから、自分は正しいとみなされたのであって、罪人ではない。罪の問題で悩む必要はないのだ。もし悩んでいるのなら、あなたは救われていないのかもしれない…そうやって教えるのです。

ヨハネが、もしそのことを教えているのなら、「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます」と言っていないはずです。現在進行形で書いているのです。キリストは罪を取り除いて下さり、神の前では全く正しい者とみなされました。大事なのは、「みなされている」ということです。実際はそうではないのに、神がみなしてくださいました。そして、御霊によって罪は清められ、洗われましたが、その後、その洗いにふさわしい歩みをすることで、自分のものにしていくのです。それを、聖め、あるいは聖化と言います。神が、神の側で私たちに成し遂げてくださった聖めを、日々の生活の中で実体験していくということです。

罪がないというように変えてくださるのは、キリストの現れを待たないといけません。「3:2 私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」私たちの聖めには、三段階があります。主を信じて受け入れた時に、罪を私たちから引き離してくださいました。これは過去に起こったことです。そして現在、その聖めを私たちが信仰によって受け入れて、日々の歩みの中で当てはめていくことです。これが今の聖めです。そして、自分の内にある罪の性質が、この体が栄光の体に変えられることによって無くなります。それが主が教会のために戻って来られた時に与えられるものです。

本文では、ヨハネは端的に、「私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。」と言っています。自分自身の胸を当てれば、罪はないなんていう発言はできないことは分かるはずです。それをあえて、「罪はない」と言い張っているのですから、自分自身を欺いているにしか他なりません。

2B 罪の告白 9

それでヨハネは、私たちが罪を持ちながらなおのこと、神と交わる道筋を教えてください。

⁹ もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

「私たちが自分の罪を告白するなら」です。ここの「告白」は、日本語だと重々しく聞こえますが、事実、自分の罪を真剣に受け止めるという意味はあるのですが、元々は「同意する」ということです。神が、これは罪であると言われていることに対して、「はい、これは罪です」と同意することです。神が言われたのだから、私が行ったこのことも罪であり、私はそれを認めます、ということです。先ほど、ダビデが罪を隠していて、内側が干からびたようになっている姿を詩篇 32 篇から読みましたが、その後で告白しています。「詩 32:5 私は自分の罪をあなたに知らせ自分の咎を隠しませんでした。私は言いました。「私の背きを【主】に告白しよう」と。するとあなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。セラ」このように赦しと清めが約束されています。

その基になっているのが、「神は真実で正しい方」ということです。多くの人が間違っているのは、罪が赦され清められるのは、自分が真実であり、正しくならないといけないというものです。いいえ、自分がいかに真実とは裏腹の、真実に欠けた人間で、正しくないかははっきりしています。私たちの神との交わりは、あくまでも神ご自身の性質に基づくものです。神は、私たちに真実を尽くしてください。どんなに罪を犯してしまったとしても、神は真実な方で見捨てることはせず、罪を告白し、悔い改めるなら、その交わりを取り戻してくださるのです。そして「正しい」方です。ここの正しいとは、神はキリストにあって私たちを赦してくださったということです。完全な罪のいけにえが与えられました。神が、ご自分の怒りをすべて御子の上に現しました。したがって、神は正しくあり、かつ罪をすべて赦すことができます。

それで、「その罪を赦す」ということです。その罪によって相手に対する負債を相手が帳消しにすることです。100 万円の借金があったとしたら、それを帳消しにすることです。そして、もう掘り返さないことです。赦しはなんと私たちを罪の責めから解放してくれることでしょうか！

それだけでなく、「私たちがすべての不義からきよめてくださいます」とあります。すべての不義なのです。私たちが受ける清めとは、少しずつではありません。「あなたには、153 の罪がありますが、今、告白したので、それでは 152 の罪だけにします。1 を引きました。」ではないのです！それでは赦しではありませんね。罪を赦すとは、全き赦しであるからこそ、赦されたと言えるのです。イエス様が、ペテロに七度まで赦せばよいのかと尋ねられた時に、「七の七十倍」と答えられました。それは、全く赦すということです。すべての不義から清められます。そのことによって、光の中に留まることができ、神との交わりができるのです。救いの喜びが戻ってきて、その喜びの中で生きる

ことができます。

ある大学生のクリスチャンの女の子が、「もし気づいていない罪があったら、告白していない罪があったら、どうするのですか？」と尋ねられ、このみことばを読ませました。よく知っている聖句だったようで、「アーメン」と答えていましたが、私が、「すべての不義って書いているよね？自分がまだ気づいていない罪も含めてなんじゃない？」と言ったら、合点が行っていたようでした。すべてが清められたという確信があるから、全き平安の中で守られるのです。

3B 罪を犯したことの否定 10

¹⁰ もし罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とする事になり、私たちのうちに神のことばはありません。

先ほどは、罪がないということの偽りについて見ましたが、こちらは、「罪を犯したことがない」という偽りです。先ほどは、自分自身を欺いているとありましたが、ここでは、「神を偽り者とする事になり」とあります。これはもっと深刻ですね。神は、私たちが罪を犯したことを前提で、それでキリストを世に遣わされ、罪の贖いを成し遂げられました。それを、罪を犯してないというのですから、その神の働きをすべて否定することであり、神のことばが、その人にはとどまっていません。

ここには、これから見ていく偽りを示唆しています。それは、自分自身は正しいと思ってやることがあり、それで仲間から離れて行く者たちがいます。兄弟を憎んでいるという罪を犯しているのに、その罪を罪とせず、正しいことだとしているのです。これは、神に対して「あなたこそが、偽り者です。兄弟を愛しなさいなどというたわけたことを言っているのだから、あなたは間違っています。」と神を偽り者としているということです。これはとんでもない冒瀆ですね。けれども、事実、そうやって神を敬っているという人が、兄弟に対する憎しみを放置しているのです。これまで、信じている者を憎み、時に迫害し、殺していった者たちは、すぐ近くにいる者たち、多くが神を敬っていると言っている者たちです。カインが弟アベルを殺しました。数々の預言者は同胞のイスラエル人から憎まれました。そして、主ご自身がユダヤ人の宗教指導者から憎まれ、使徒たちも同様です。兄弟を愛するということが、どうして悪いことなのかと挑みかかることは、神ご自身を偽りとしているに他ならないし、その人は、神の言葉を受け入れてない、つまり救われていないということです。

こうやって、私たちは神との交わりについて学びました。光の中における交わりであり、御子イエスの血によってすべての罪が清められている中での交わりです。何か、高尚な知識を得て霊的になるのでもなく、特別な体験をしたから霊的になるのでもありません。キリストが肉体を取られたように、私たちも生身の体を持っており、その中で罪の告白と悔い改めの生活を送りつつ、神との交わりを保つことができます。